

日本語用論学会

第14回(2011年度)大会

講演・発表要旨集

12月3日(土曜日)

特別シンポジウム (10:00~12:00) [1号館 151教室]

テーマ:「災害とコミュニケーション」

司会:

森山卓郎(京都教育大学)

東日本大震災のような大きな災害に対して、言語研究に何かできることはないのか——この重い問いに対して、言語とコミュニケーションに関わる学会として何か考えたいというのが本特別シンポジウムの出発点である。例えば次のようなことは課題であろう。①災害時の避難情報等の伝達(避難情報の伝達やパニック防止等) ②災害につきもののデマの問題(言語表現とデマの形成、情報の信頼性評価等) ③被災地支援の問題(支援者と被災者の言語背景の問題等) ④助け合いのコミュニケーション(ポライトネス理論等) 今回、震災経験のある言語研究者として名嶋先生、情報工学研究者の河原先生、社会心理学研究者の吉川先生をお迎えして、社会的責務をふまえた「言語研究の新たな展開の可能性」について、ブレーンストーミング的に豊かな議論ができればと思う。

1) 言葉は失われたのか—「語る」ということをどう考えるか—

講師:名嶋義直(東北大学)

災地の状況を目の当たりにして「言葉を失った」という声を聞く。果たして我々は本当に言葉を失ったのだろうか。確かにある種の言葉の働きには限界がある。一方、他者に対し積極的に言葉を駆使したことを示す例もある。なぜ我々は給水所で並んでいた時に自ら他者に話しかけたり他者から話しかけられて会話に応じたりしたのか。なぜスローガンが「がんばって」から「がんばろう/がんばっぺ」に変わったのか。なぜ被災者は思い出したくもないはずの経験を問わず語りに話し出すのか。なぜ人は「言葉を失った」と吐露するのか。我々は何のために語ったのか。「『語る』ことは『他者とつながる』こと」である。我々は「語る」ことで共有し共感し共生する。人がつながることから社会が生まれるのなら、災害時や災害からの復興過程において「いかにつながるか」ということは重要な課題である。未来への希望を込め「『語る』ことは『生きる』こと」とであると語りたい。

2) 情報の信頼性判断を支援する言語処理技術

講師:河原大輔(京都大学)

人々は、さまざまな情報を収集、比較し、日常的な意思決定を行っている。従来は、テレビ、ラジオなどの旧来メディアあるいは人伝えで情報を手に入れていたが、近年、Webが普及したことにより、ブログ、マイクロブログ、SNSなどから大量の情報が

簡単に入手できるようになった。しかし、それらのWeb情報は玉石混濁であり、多種多様な報道、主張、意見などが存在する。そのため、それらの情報の信頼性を判断する必要があるが、Web情報は爆発的に増え続けており、このような判断を自分自身で行うには限界がある。特に災害時においては、災害情報の信頼性判断がクリティカルな問題となる。本シンポジウムでは、人々の情報信頼性判断を支援するための言語処理技術について概観し、特にあるトピックに関する主要・対立・対比言明を自動的に抽出し、俯瞰的に提示する技術について議論する。

3) 東日本大震災に見るリスク・コミュニケーションの問題

講師:吉川肇子(慶応義塾大学)

東日本大震災に見るリスク・コミュニケーションの不適切な事例をもとに、コミュニケーションの知識や技術のなさが引き起こした混乱の問題を論じる。たとえば、語用論に関する知識のなさは、「直ちに影響はない」という表現が頻用されることにつながった。結果として、社会に無用な混乱や対立を引き起こした。また、危機管理担当者が持つ人間観(典型的には、人々はパニックを起こすという「パニック神話」)は、情報公開の不徹底をもたらした。また、風評被害やデマというようなネガティブな現象が、実際には確認されていないにもかかわらず、行政などから頻繁に指摘されたとも、かえって問題を大きくした。今後の改善のために、緊急時における人間行動についての知識を改め、情報を隠蔽したり控えめにしたりするのではなく、情報を十分提供した上で、より良い意思決定をしてもらうためのリスク・コミュニケーションのあり方が再検討されなくてはならない。

研究発表 (13:35~16:00) [1号館]

1室[1号館 151教室]

1. 語用論的観点からみる縮約表現の一考察 —ポライトネスを反映する“チャウ”を事例に—

張 又華(京都大学(院))

本発表の目的は、従来スタイルの違いとして扱われる「テシマウ」の縮約形「チャウ」が、単にその元の形式と置き換えられる存在ではなく、語用論的側面において異なった役割を果たすことを指摘したい。「チャウ」は、コミュニケーションにおいて相手に行為の達成を要求する場合、表現全体を柔らかくする効果、即ちポライトネスが現れる。それは、「チャウ」のアスペクティブ意味—行為・事態の部分的達成解釈(張 2010)に由来すると考えられる。また、敬語・恩恵表現と共に起る容認度の差から、「テシマウ」と異なったことをあらためて確認した上、「チャウ」は、相手向きの特徴が観察された。

参考文献: (1) 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』. 東京: 研究社. (2) 張 又華. 2011. 「日本語アスペクトに関する認知言語学的研究—補助動詞の分析を中心に—」. 京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士学位論文. (3) 梁井久

江. 2003. 「「テンマウ」と「チャウ」の相違」, 『日本語教育学会春季大会予稿集』67-72.

2. 存在表現の適用 —「やる」と「売る」の自動詞用法—

大西美穂(名古屋大学(院))

「あ、再放送がやっている」や「エサが自動販売機で売っている」は、それぞれ、この発話時に話者の眼前で特定のテレビ番組が放映中であることや、商品が販売中であることを示す比較的新しい表現である。日本語母語話者にとって必ずしも適格であると判断されない表現であるが、その理由は、他動詞「やる」や「売る」が自動詞構文の構造を作っているためである。ところが、これを誤用と断ずるには出現頻度が高いということが先行研究でも2000年代前半から指摘されている。本発表では、この自動使用法が生じる動機として、これらの表現が存在動詞「ある」の使用範囲の欠落を補完するものであり、現時点ではこれらの表現が日本語の文法体系の中で生産的なクラスとは言えないという考えを示す。この主張を、存在文の構文スキーマの拡張的な事例化として論じる。また、売り手や買い手の背景化を「主観性」の点から考察する。

参考文献：(1)Langacker, R. W. 2000. "A Dynamic Usage-Based Model." In M. Barlow and S. Kemmer (eds.) *Usage-based Models of Language*. CA.: CSLI Pub. (2) Langacker, R. W. 2006. "Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes." In Angeliki Athanasiadou, et al. (eds.), *Various Paths to Subjectivity*. Berlin: Mouton de Gruyter.

3. 若者ことばにおける「盛る(もる)」の意味拡張

神澤克徳(京都大学(院))

ここ数年、20歳前後の若い女性を中心に、日本語の動詞「盛る(もる)」が「かわいくする」(e.g. ありつくま(注: 人名)はどの長さがいいばん盛れるのー?) や「やる気が出る」(e.g. マツゲが盛れていないと、仕事も盛れないと思う今日この頃。)の意味で使用される。本発表では、(i) この意味拡張のプロセスを Traugott and Dasher (2005) などの意味変化の誘導推論理論 (The Invited Inferencing Theory of Semantic Change model) から考える。(ii) また、この意味拡張が若い女性中心であるという事実から、特定の語の使用頻度の男女間、世代間の差が、コミュニティ間の多義体系の差を生み出している一例として位置付ける。

参考文献：[1] Traugott, Elizabeth C, Richard B. Dasher. 2005. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. [2] 米川明彦. 2006. 「若者ことば研究序説」. 『月刊言語』, Vol.35 No3, 20-25. 東京: 大修館書店.

2室[1号館 152教室]

1. "Mummy, I really, really saw a ghost in the school toilet!" A study of children's pragmatic competence and evaluation of persuasive discourse

Dawn Teo Siew Hui (National University of Singapore)

This paper applies a rhetorical framework comprising the three rhetorical appeals – logos, pathos and ethos – and concepts from pragmatic theory to persuasive discourse. Seven children, aged 7 to 10, individually imaged persuading a specific audience of the authenticity of a ghost-sighting and their experience of parental unfairness as well as to evaluate the persuasion produced by their participating peers. The children produced discourse based largely on logos and rated such as highly persuasive. They also demonstrated awareness that tone of voice, facial expression and relationship with audience affected persuasiveness. Data thus

showed that the children designed and evaluated persuasion by considering the beliefs, desires and intentions of their audience, suggesting that the rhetorical framework closely matches children's implicit model of persuasion. Additionally, interpretation of trends in data required concepts from pragmatics such as 'face needs'. This finding distinctly demonstrates that a rhetorical framework combined with more traditional pragmatics approaches affords both a deeper and broader understanding of persuasion.

References: Jacobs, Scott. 1989. Speech acts and arguments. *Argumentation* 3. 345-65. Jesus, Larrazabal M., and Kepa Korta. 2002. Pragmatics and Rhetoric for Discourse Analysis: Some conceptual remark [Online]. In Dascal's Festschrift. *Manuscripto XXV* (2):33-48. Available: www.sc.ehu.es/ylwkocak/papers/Pragmatics%20and%20Rhetoric.pdf

2. Identity in practice: the use of terminological resources and identity formation at conversation analytic data sessions in Japan

BUSHNELL, Cade (University of Tsukuba)

A number of conversation analytic studies have engaged CoP in recent years (e.g., Brouwer & Wagner, 2004; Helleman & Cole, 2009). However, as Hauser (2011) argues, there are risks involved in such an approach. If and how the participants (a) organize their group as community, (b) co-constitute a shared repertoire of participatory resources, and (c) work up and manage identities as practitioners within that community, constitute empirical questions. In the present study, I examine interactions at conversation analytic data sessions in Japan. The analyses focus on how the participants use terminology during their participation in doing data analysis, and how such terminology use is implicated in constituting their group as a community, and in working up and managing identities within that community.

Works cited: (1) Brouwer & Wagner (2004). Developmental issues in second language conversation. *Journal of Applied Linguistics*, 1(1), 29-47. (2) Hauser, (2011). On the Danger of Exogenous Theory in CA-for-SLA. *Applied Linguistics*. (3) Helleman & Cole (2009). Practices for Social Interaction in the Language-Learning Classroom: Disengagements from Dyadic Task Interaction. *Applied Linguistics*, 30(2), 186-215.

3. Okay in the pre-second position in Q&A sessions of international scientific conference presentations

OKADA, Yusuke (Ritsumeikan University)

This conversation analytic studies aims to clarify what the type of "okay" accomplishes, which is employed in the pre-second (i.e. pre-answering) position after a question from an audience member. The analysis of four examples found in the corpus of Q&A sessions of international scientific conference presentations discovered that "okay" is employed at the pre-second position in the following sequential environment: (1) a question to the presenter from an audience member; (2) a certain length of gap of silence; (3) repair-proper by the questioner (which is or not followed by a repair-initiation by the presenter); (4) "okay" by the presenter (which is or not followed by a further gap of silence); (5) an answer to the question. The analysis indicates that "okay" is tactically employed by the presenters as a transition marker to maximize the positive inference to the presenter's knowledge on the questions being asked by the audience members.

4. Metalinguistic Negation in Dhaasanac

NISHIGUCHI, Sumiyo (Tokyo University of Science)

This data is from my fieldwork in 2005-06 and 2011. In Dhaasanac, stress on negative sentences cancels negation and

emphasizes the affirmative answer. I did not swim with pitch and intensity accent means I did swim.

- (1) A: Ko kin ōanate?
you really swim.2SG.PAST
“Did you really swim?”
B: {Yáá/Yu} ma ōanan.
ISUB/I.ABS not swim.1SG.PAST
“I did swim, didn’t I?”

Such polarity reversal requires specific context□the presence of really or the hearer’s doubt. Really is known to indicate the questioner’s bias (Romero&Han 2004). The non-truth-conditional interpretation of negation is a characteristics of metalinguistic negation (Hom 1985). The focused negative sentence expresses objection toward the previous utterance. Disbelief is not allowed in any of the deontically accessible worlds of the speaker.

References: (1) Hom, L. R. (1985). Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity. *Language*. (2) Romero, M. and C.-h. Han (2004). On negative yes/no questions. *Linguistics and Philosophy*. (3) Tosco, M. (2002). *The Dhaasanac Language*.

3室[1号館 153教室]

1. 自分と自己 汪 宇(東京福祉大学)

本発表は「統語論」「意味論」「語用論」の三つの領域を一つの体系としてみなし、その体系の中で「自分」と「自己」の違いを分析する。統語論においては、指示対象との位置関係に着目し、「自分」は「自己」より指示範囲が広いことを論じる。意味論において、話し手との関連度に注目し、「自分」は「自己」より話し手との関係が密接であることを検討する。最後に語用論において、使用頻度の高さを考慮した、「広告文」に使われる「自分」と「法令」に使われる「自己」を対象に、それぞれの伝達状況と可能な伝達効果を説明する。つまり...そのような伝達効果は結局両者の統語的、意味的な相違、そして使用域の特徴によって、総合的に生み出されているということを示す。

参考文献: (1)ハリデー・ハッサン.1985.邦訳『機能文法のすすめ』大修館書店.(2)広瀬幸生・加賀信広.1997.『指示と照応と否定』.1-89.研究社出版.(3)関沢英彦.2005.「内なる声としての広告-人称詞と広告メッセージへの同一化現象」.The journal of communication studies.23.37-60.

2. 話し手が自分自身を you で語ることの意味

中山 仁(福島県立医科大学)

英語では、話し手が自分自身の体験や個人的意見を述べる際に、自分のことをIではなくyouで表わす場合がある。本発表ではこの種のyouの発話意図について、総称用法としてのyouの持つ意味的特徴を手がかりとし、二人称としてのyouとの関係や、発話の場におけるyouの語用論的機能に言及しながら考察する。自分自身を語るyouについては、これまで、総称用法に基づく立場と、二人称としての解釈に基づく立場から説明がなされている。総称のyouとされる例の中には実質的に話し手自身を表すものが含まれていることなどから、本発表では基本的に前者の立場をとる。その上で、総称のyouによって示される対象は単なる人一般とは限らず、特に、話し手が自らの体験や個人的意見を述べる場合、総称による一般論を通して間接的に話し手に言及することが可能であることを示す。さらに、総称用法のyouによって示される発話態度に基づき、自分自身を語るyouが聞き手に与える効果についても考える。

参考文献: (1)Bolinger, D. 1979. “To Catch a Metaphor: You as a Norm,” *American Speech*, 54 (3), 194-209. (2)小森道彦.

1992. 「人称ダイクシスの磁場」『グラマー・テキスト・レトリック』185-209. くろしお出版. (3)マーク・ピーターセン. 1990. 『続日本人の英語』 岩波書店.

3. 未来パーフェクトのシテイルが表す、聞き手への配慮について

上原由美子(神田外語大学)

本発表では、「先に行っています」などの文に見られるシテイルが、アスペクトとしては、未来パーフェクトを表すこと、および聞き手への配慮を表す機能を持つことを論じる。このようなシテイルの文は、スルの文(「先に始めるよ」と置き換え可能な場合があるが、シテイルの方が聞き手への配慮が感じられる。この現象を、パーフェクトが含む3つの時点(発話時点、出来事時点、設定時点)の観点から考察し、話し手が、話し手自身の行為を表す際にパーフェクトを用いることで、同時に聞き手のことも考慮に入れることになること、さらに、これが聞き手への配慮につながることを示す。このシテイルは、アスペクトを表す文法形式が間接的に対人的な配慮を表すという点、および使用が任意であることから話し手の意識が形式の選択に反映されやすいという点で特徴がある。

参考文献: (1) 工藤真由美.1995.『アスペクト・テンス体系とテキスト-現代日本語の時間の表現-』ひつじ書房. (2)谷口秀治.1997.「テイル形に関するムード的側面の考察」『日本語教育』92号. 143-152.

4室[1号館 154教室]

1. 法副詞 no doubt の用法 岡本芳和(金沢星稜大学)

法副詞(modal adverbs)はこれまで様々な観点から考察されてきたが、考察の主眼はその主観的な命題態度に置かれ、間主観的・言語行為的側面は十分に考察されてこなかった。本発表の目的は、法副詞 no doubt を用いる話し手の心的態度や法副詞 no doubt を使用することによって生じる主観化・間主観化のプロセスを考察してみたい(「主観性」・「間主観性」の定義は Traugott (2010)、澤田(編)2011などに従う)。また、法副詞 no doubt に関する主観化から間主観化へのプロセスには、文法化のプロセスも関係していることも触れてみたい。

参考文献: (1) 澤田 治美 (編). 2011. 『ひつじ意味論講座 (5) 主観性と主体性』. 東京: ひつじ書房. (2) Simon-Vandenberg, Anne-Marie. 2007. “No doubt and Related Expressions: A Functional Account.” In Mike Hannay and Gerard J. Steen (eds.) In *Structural-functional Studies in English Grammar*, 9-34. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. (3) Traugott, E. C. 2010. “Revisiting Subjectification and Intersubjectification.” In Kristin Davidsen, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.) *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*. Berlin: Mouton de Gruyter.

2. no doubt の談話機能に関する実験的調査

鈴木大介(京都大学(院) / 日本学術振興会)

藤原 崇(近畿大学(非))

本研究では、機能言語学の観点から実験的手法により談話的情報を引き出すことで、英語法副詞の談話機能を実証する。具体的には法副詞 no doubt を扱い、アンケート調査の結果に基づいて、その類義表現である doubtless, undoubtedly, without doubt との談話機能の違いを論じる。コーパス分析においては実際に様々な要因が関わっており、調査すべき要因に限定して見ることができないため、本稿では実験的手法を導入する。変数として、談話構造の観点から、(i)生起位置と(ii)節の主語(代名詞)という各要因の影響を調査し、さらに、

この2要因の交互作用も検証する。結果として、(i)の要因の影響力の大きさや、(i)と(ii)の要因の組み合わせによる効果が得られ、4つの法副詞(句)の中ではとりわけ *no doubt* が談話的な要因と密接に関わっていることがわかった。実験的手法の利点も示唆する予定である。

参考文献: (1) Quirk, R. (1968) "Co-existing Negative Preterite Forms of *Dare*." In Quirk, R. *Essays on the English Language: Medieval ad Modern*. London: Longman, 114-19. (2) Simon-Vandenberg, A. and K. Aijmer (2007) *The Semantic Field of Modal Certainty: A Corpus-Based Study of English Adverbs*. Berlin: Mouton de Gruyter.

3. oppositeの意味論と関数的解釈

黒川尚彦(大阪工業大学)

本発表は、「反対」を表す *opposite* が形容詞・副詞・名詞・前置詞など多様な用法を持つ一方で、そのコード化された意味は一義的であり、いずれの用法の場合も、基本となる概念から語用論的に派生された解釈であることを関連性理論(語彙語用論)の観点から示す。さらに、そのうちのある場合に、*opposite* が(数学的)関数として機能することを例証する。*opposite* のような関係性を表す語は、その理解において関係性に関与する要素の同定が要求される。*opposite* の場合、その本質的性質が二元性であることから2つの要素が関与するが、言語的であれ文脈的であれ一方しか同定されない場合でも *opposite* が関数として働くことで他方が語用論的に同定されることを明らかにする。また、名詞句 *the opposite* の場合、Donnellan (1966) の言う *attributive use* と *referential use* があることを示唆する。

参考文献: (1) Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford. (2) Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford. (3) Donnellan, K (1966) "Reference and Definite Descriptions." *The Philosophical Review* 75-3, 281-304.

4. 日本語の接続助詞「と」とインドネシア語の接続詞 *begitu*, *ketika*, *kalau* 一用法の対照とテーマ・レーマの考察

IKHTIARI, Tiwuk(京都大学(院))

本発表は、まず「時」を表す日本語の接続助詞「と」の用法を考察し、「時」を表すインドネシア語の接続詞 *begitu*, *ketika*, *kalau* との対応関係を明らかにすることを目指すものである。そして、この「時」を表す文を、文における談話的に異質な二つの要素としてのテーマ・レーマの関係(「既知(旧情報)と未知(新情報)との関係」)において分析してみたいと思う。具体的には、この関係を基礎として、村上春樹の小説「ノルウェイの森」に現れる「時」を表す文とそのインドネシア語の翻訳を比較・対照することにより、それぞれの言語の特徴を明らかにすることである。

参考文献: (1) 蓮沼昭子. 1993. 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」. 『条件表現』. くらしお出版. (2) Haiman, John. 1978. "Conditionals are Topics". *Language* 3. 564-589. (3) Dancygier, Barbara. 1998. *Time, Knowledge, and Causation in Conditional Constructions*. Cambridge University Press.

ワークショップ (13:35~15:15) [1号館 143教室]

メディア・ディスコースにおける「らしさ」の表象
—キャリアウーマン、草食男子、父親・母親をめぐって—

司会: 高木佐知子(大阪府立大学)

1. 「男らしさ」の危機か —ブログに見る「草食男子」への評価—

神田靖子(大阪学院大学)

従来の「男性性」とは対極的な特徴を持つとされる「草食男子」を体現する男性が日本社会に定着しているかにみえる。本発表は「草食男子」に対する一般的日本人の評価と彼らの抱く「男らしさ」のイメージを、過去4年間のブログ分析によって明らかにしようとしたものである。分析方法として、感情評価といった質的分析および一定量の量的分析をも可能とする装置である Martin and White(2005)の「アプレイザル理論」を採用し、その中の「態度評価 Attitude」の下位項目である「感情評価 Affect」、「道徳評価 Engagement」および「観照評価 Appreciation」を採用した。結果としてブロガーの評価は感情評価より道徳評価が主であること、性別によって異なるが総じて批判的評価から肯定的評価へと変化していること、真剣な議論の漸減から「草食男子」が既成概念として定着したと見られることなどがわかった。

参考文献: (1) Martin, J.R. and White, P.R.R. 2005. *The Language of Evaluation - Appraisal in English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. (2) Martin, J.R. and White, P.R.R. 2005. Appraisal Website Home Page (accessed 20110329)

<http://www.grammatics.com/appraisal/AppraisalGuide/Framed/Frame.htm>

2. 日本の両親向け育児雑誌における父親らしさ・母親らしさの表象

稲永知世(北陸大学(非))

本研究は、Fairclough (1992, 2003) の概念に基づく批判的談話分析を援用し、日本の両親向け育児雑誌における、父親と母親の育児役割に関する表象を分析する。そして、父親らしさと母親らしさがどのように想定されているのかを明らかにすることを目的とする。とりわけ、(1) genres (行為の仕方)、(2) discourses (表象の仕方)、(3) styles (存在の仕方) に焦点を当て、それぞれ、(1) 意味関係、叙法、(2) 語彙、社会的行為者、前提、(3) モダリティ、評価、人称代名詞を分析する。結果的に、上記の育児雑誌は父親も読者対象とし、進歩的な様相を呈しているにも関わらず、「母親が主に育児・家事に従事し、父親は母親を手伝う存在にすぎない」という想定が表象されていることが明らかとなった。つまり、育児役割における伝統的な父親らしさ・母親らしさが想定されていると言える。

参考文献: (1) Fairclough, N. 1992. *Discourse and social change*. Cambridge: Polity Press. (2) Fairclough, N. 2003. *Analyzing Discourse: Textual Analysis for Social Research*. London: Routledge.

3. 働く女性と「女らしさ」—日本のキャリアウーマン雑誌の談話分析—

高木佐知子(大阪府立大学)

本発表の目的は、日本の働く女性に対して、メディアではどのような表象がなされているのかを明らかにすることである。批判的談話分析の観点に基づき、Fairclough (1995, 2001) と Talbot (1992) の概念を援用して、キャリアウーマンの雑誌記事における書き手と読者のインターアクションの分析や、語彙・スタイル・前提などの考察を行った。その結果、インターアクションに関しては、「能力の肯定」を行うとともに、「自信のなさや控え目な態度に評価を与える」という機能などが認められた。また、前提からは、キャリアウーマンの「不完全さ」や「不安」の表象が浮かび上がった。このような、いわゆる「キャリア性」と「女性性」の表象の混在に関して、社会における働く女性へのイメージや期待について考察を行った。

参考文献: (1) Fairclough, N. 1995. *Media Discourse*. London: Edward Arnold. (2) Fairclough, N. 2001. *Language and Power (second edition)*. London: Longman. (3) Talbot, M. 1992. "The construction of gender in a teenage magazine." in N. Fairclough (ed), *Critical Language Awareness*. London: Longman, 174-199.

Plenary Lecture (16:20~18:20) [1号館 151教室]

Chair:

Ryoko Suzuki (Keio University)

Lecturer:

John W. DU BOIS (University of California, Santa Barbara)

Empathy for syntax

Is it possible to have empathy for syntax? The idea doesn't seem promising. We seem to be mixing two different things, if we try to combine an emotion (or affective orientation) with a grammatical apparatus. The widespread conceptualization of grammar as a machine doesn't seem to leave much room for any emotion, least of all empathy. Some cracks in the generative position have appeared, however, notably in Susumo Kuno's important early suggestions about empathy /in/ syntax, which at least hints that there could be something going on between these two.

But I want to go further, to ask: Is it /necessary/to have empathy for syntax? That is, do speakers actually /need/to draw on the human capacity for empathy in order to be able to do syntax, in the particular ways that humans do it? I will look at some of the complex and subtle syntactic structures and strategies that speakers create as they perform syntax in everyday life, when they are left to their own goals and devices, asking what role empathy might play, if any. I explore the question of empathy as a grounding for syntactic production in light of two theories which I have been developing in recent years: dialogic syntax and stance. Based on these theories and the empirical evidence they allow us to identify, I will suggest that there are actually quite powerful forces that link empathy and syntax. I will address the relation between the emergence of emotion in interaction and the ways that participants construct the sociocognitive relations of intersubjectivity via dialogic resonance and stance alignment. If time allows, I will bring in some recent joint work (with Peter Hobson and Jessica Hobson) on the discourse of children with autism, in which problems in establishing intersubjective relations seem to underlie atypical patterns of syntactic production. As a report on work in progress, this presentation will surely raise more questions than it answers; the goal is rather to open a discussion of the possibility that empathy plays a critical role in grounding the process of making language together, with special implications for syntax.

12月4日(日曜日)

研究発表 (10:00~12:25) [第1学舎 5号館]

5室[1号館 151教室]

1. 主題非明示型結果構文の主語名詞句に関する意味的・語用論的制約について 對馬康博(札幌大学)

本発表はTsushima (2010)が「主題非明示型結果構文」と呼ぶ言語現象(e.g. Our new washing powders washes whiter! (Aarts 1997: 174))の主語名詞句に関する意味的・語用論的制約を認

知言語学の枠組みから主に以下の2点提案する。第一にプロトタイプは道具主語であるが、それは複雑なメカニズムを持ち、事態遂行のための属性を持ったものでなくてはならないという制約を提案する。第二に周辺的事例となるが、人主語であっても道具主語の事例と同様にそこに事態遂行のための属性、つまり能力を持ち合わせていると語用論的に読み込める場合のみ容認可能になるという制約を提案する。これらの制約はSchlesinger (1995: 98-99)があげる道具主語の4つの要因 complexity, essential property, independence, saliencyのうち後者3つを1つに還元した上で、2つの認知的動機付けによって支持されるものと主張する。

参考文献: (1) Aarts, Bas. 1997. *English Syntax and Argumentation*. Basingstoke: Macmillan Press. (2) Schlesinger, Izchak M. 1995. *Cognitive space and linguistic case*. CUP. (3) Tsushima, Yasuhiro. 2010. *A Cognitive Linguistic Study of Implicit Theme Resultative Constructions and Their Related Constructions*. A Doctoral Dissertation. Hokkaido University.

2. 英語連結的知覚動詞構文の補文分布への意味論的アプローチ:属性・状態叙述の違いに着目して

中村文紀(慶応義塾大学(院))

本発表の主眼は、英語連結詞的知覚動詞構文 (e.g. John looks happy) に生起する補部の生起条件を意味の観点から分析を行うことである。説明に使う道具立ては、Kaga (2007)で提唱された形容詞述部の三分類(属性叙述、状態叙述、状況叙述)を用いた。研究方法は、補部を形容詞に限定し、British National CorpusとWebから用例を集めた。分析の結果、この構文は、主語の内在的性質を表す属性叙述(e.g. intelligent)と状態叙述を表す状態叙述(e.g. happy)は容認するが、主語の置かれた外在的状況・事態を表す状況叙述(e.g. *John looks present.)などは表せないことがわかった。最後にこのような制約が構文全体の意味との整合性の問題であり、外見などの知覚的証拠から推論を行ったという全体の意味との関連性を論じる。

参考文献: Kaga, N. 2007. *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*. Tokyo: Kaitakusha.

3. ダイクシスにおける直示中心の階層スケールと語用論

澤田 淳(関西外国語大学)

英語の直示的移動動詞の包括的分析として、Fillmore (1975, 1997)の「come/goの選択原理」がある。Fillmoreの「come/goの選択原理」は、英語のcome/goの分布の多くを正しく予測するが、この原理では説明できない事例も存在する。本章では、「直示中心の階層スケール」という新たな語用論的モデルによって、その問題が解決できることを示す。直示中心のメンバーを均質的ではなく、階層的に捉えることで、英語の直示的移動動詞の分布関係、及び言語間の直示的移動動詞の運用上の差異が捉えられる。さらに、本研究の直示中心の階層スケールモデルを採用することにより、従来の Bühlerの「オリゴ・モデル」と Langackerの「グラウンド・モデル」では説明が困難であった言語間の直示的中心のデフォルト差を捉えることが可能となる。

参考文献: (1) Fillmore, Charles. J. 1975. *Santa Cruz Lectures on Deixis 1971*. Indiana: Indiana University Linguistic Club. (2) Fillmore, Charles. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.

4. 推論による不定指示について —日本語のソ系指示詞の解釈— 杉山さやか(京都大学(院))

本発表では、日本語のソ系指示詞の用法の中でも周皮的とされてきた「不定」の用法について考察する。現代日本語の指示詞の先行研究では、一般に、ソ系指示詞の使用には発話現場に指示対象があるか、先行文脈に言語的先行詞が必要であるとされる。しかし、「<テレビ番組タイトル>その時、歴史が動いた」あるいは「<結婚情報誌の広告文>その彼はその人？」のように、現場に指示対象があると考えるべく、また先行詞とソ系指示詞との関係が言語上明示されておらず、推論によって理解される必要のある事例を観察することができる。岡崎(2010)では推論による照応の中には不定な部分を含んだものがあると指摘しているが、不定が生じる要因についてとくに考察を加えていない。本発表の目的は、その要因を「量化との関わり」および「指示的(referential)用法」と「属性的(attributive)用法」という観点から考察することで、ソ系指示詞による不定解釈の生じる仕組みを明らかにすることである。

参考文献:(1)岡崎友子. 2010.『日本語指示詞の歴史的研究』. 東京. (2) Donnellan, K.S.1966. "Reference and Definite Descriptions." *Philosophical Review* 75, 281-304.(3) 東郷雄二. 1999. 「談話モデルと指示—談話における指示対象の確立と同定をめぐる—」, 『総合人間学部紀要』6, 35-46.(4)山梨正明. 1992.『推論と照応』. 東京.

6室[1号館 152教室]

1. Mental causality in BECAUSE/SINCE/IF clauses: A case study of grammar-pragmatics interface

KATAOKA, Hirohito (Osaka Dental University)

The paper focuses on a subclass of causal/conditional clauses where of pragmatic 'mental' causation (Searle 1998, 2004) is involved, and argues for its significance to English grammar on the ground of two grammatical constructions. First, we will examine causal clauses where counterfactuality is involved. Mentally causal sentences license counterfactuality, while non-mentally causal sentences do not: 'They refused the chicane because it would have been unfair...' vs. '*Last week it was cold because it would have been raining.' Mentally causal sentences imply beliefs on the part of agents, and the beliefs embed counterfactual propositions. Second, we will examine 'backward' temporal relation as in 'I'll take an umbrella because it will rain.' This seemingly paradoxical relation, involving allegedly unusual occurrence of WILL, can be explained by taking mental causation into consideration.

References: (1) Dancygier, Barbara and Eve Sweetser 2005. *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Searle, John R. 1998. *Mind, Language, and Society: Philosophy in the Real World*. New York: Basic Books. (3) Searle, John R. 2004. *Mind: A Brief Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

2. Allo-repetition to develop the story: From storytellers to story-recipients in English narratives

UCHIDA, Lala (Tokyo Denki University)

My aim is to shed light on how repetition of story-recipients' utterances by storytellers affects storytelling. For this purpose, I investigate the use of allo-repetition in terms of place, form, and content, focusing on three components proposed by Ochs et al. (1992): explanatory, challengeability, and redrafting. The data consists of ten audiotaped face-to-face conversations between English speakers. My analysis shows that storytellers repeat the story-recipients' words chiefly as answers and links, to summarize and develop their story. In addition, answering is fulfilled the most in challengeability, followed by linking, while linking occurs most frequently in explanatory and redrafting,

followed by answering. I identify two kinds of collaboration being encouraged by repetition: contextual collaboration and expressional collaboration.

References: (1) Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (2) Ochs, E., Taylor, C., Rudolph, D., and Smith, R. 1992. Storytelling as a theory-building activity. *Discourse Processes* 15: 37-72.

3. 中国語の物語における文脈指示詞「这」と「那」について — 談話内部の四層構造の観点から —

劉 巖(京都大学(院)/日本学術振興会)

従来の研究では、談話の内部構造の観点から中国語の文脈指示詞を扱ったものはまだ見られていない。これに対し、本研究は物語に限定し、談話の内部構造から文脈指示の「这(こ)」と「那(そ)」(観念指示の「那(あ)」を除く)の用法を考察した。その結果、「導入部」「コメント部」及び「終結部」では「这」が用いられやすいが、「那」は用いにくい。「展開部」における部分的なトピックを指し示す時に「这」と「那」の両方が用いられるが、「那」のほうが多いと観察された。一方、包括的なトピックを指す時「这」が用いられるが、「那」が用いられないということが分かった。

参考文献:(1) 浜田 秀 (2001)「物語の四層構造」『認知科学』, 8-4, 日本認知科学会, pp.319-326 (2) 沈 家焯 (1999)『不对称和標記論』. 江西教育出版社, 江西.

4. 「古池やかわず飛び込む水の音」の英訳における解釈のプロセス — より良い俳句の英訳は存在するのか

石丸雄介(百合学院(非))

俳句は、その短さゆえに作者の感情や思想を詳しく述べることは不可能であると言わざるを得ない。そのため、俳句には、切字などの俳句独自の表現方法が存在し、俳句は、独特の詩的世界を形成している。

松尾芭蕉の「古池」の句には、驚くべきことに百種類以上の英訳がある。外山(1979:49)が指摘しているように、俳句は、「多元多解であいまい」な文学作品であり、「享受者を立てて、その積極的参加を許す」文芸である。したがって、俳句の翻訳者も積極的に参加できる享受者の一人であり、その翻訳に誤りというものはないとも考えることができる。

いくつかの「古池」の英訳を見ていくことによって、翻訳者がどのように元の俳句を解釈し、どのようなイメージを創り上げようとしているかの一端が見えてくると思われる。本発表では「古池」の原句の解釈を出発点とし、様々な英訳俳句を考察していく。

参考文献:(1)Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization* (2)Sato Hiroaki. 1995. *One Hundred Frogs* (3)外山滋比古.1979.『省略の文学』(4)山梨正明.1995『認知文法論』

7室[1号館 153教室]

1. マスメディアの科学ディスコースを通じた数の認識 — メタファー的思考に着目して —

出口由美(関西大学(院))

本研究は、マスメディアを通し一般人に向けて科学知を普及するディスコースを対象とし、その中の「数値」の使用に関する分析を行うことで、一般人による科学知の認識のあり方を解明することを目的とする。とりわけ、数値に伴う単位(パーセ

ント・分数・倍数など)や数値のグラフ化に着目しながら、以下の点に取り組む。まず、数値の認識にメタファー的思考が関係することを示し、続いてメタファーの中でも「基礎づけるメタファー-Grounding Metaphors」(Lakoff & Núñez, 1997, 2000)と「教育的メタファー-Pedagogical Metaphors」(Boyd, 1993; Boero et al., 2001)という2種類のメタファーがマスメディアの科学ディスコースにおける数値の認識に関わることを明らかにする。最後に、これら2種類のメタファーを通して数値を認識する際に伴う、現実に関する心的操作のメカニズムについて分析を進める。そこには「集約化」と「分散化」という2つの相反する心的操作が関与することが明らかになる。

参考文献: (1)Lakoff, G. & R. Núñez. 2000. *Where Mathematics Comes From*. New York: Basic Books. (2)Boyd, R. 1993. Metaphor and theory change: what is 'metaphor' a metaphor for? In A. Ortony (ed.) *Metaphor and thought* 2ed. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 481-533.

2. 緊急事態と非常事態における情報伝達—関連性理論におけるコミュニケーションの効率性—

新井恭子(東洋大学)

先の東日本大震災と福島原子力発電所の放射能漏れ事故では、緊急事態・非常事態における情報伝達に多くの課題が残された。特に、緊急地震速報、津波警報が効率よく伝わらなかったことや、政府高官や東京電力関係者の記者会見における誤解をまねく発言や失言、わかりにくい表現などが多く指摘された。このような現状を鑑み、本研究では、関連性理論の枠組みの中で、情報伝達の効率性について論じ、どのようなことばをどのような方法で伝えれば効率良く伝わるのか考えてみたい。

まず非常に研究が進んでいる民間航空会社の緊急脱出用マニュアルから、緊急事態に使用される旅客誘導の言葉・表現の特徴を関連性の概念を使って説明を行う。次に今回の緊急地震速報と津波警報の言葉と比較し、どのような点が問題であったのかを検証する。また、非常事態の記者会見についての問題点も関連性理論の見地から明らかにし、改善点を提案したい。

参照文献: (1)今井邦彦監修 (2009)、『最新語用論入門 12 章』、大修館書店 (2)吉川肇子、(2000)、『リスクとつきあう』、有斐閣 (3)「東北地方太平洋沖地震による津波被害を踏まえた津波警報改善に向けた勉強会」資料集と報告書(気象庁ホームページより) http://www.seisvol.kishou.go.jp/eq/tsunami_kaizen_benkyokai/benkyokai/index.html

3. 直接話法を導く談話標識の解釈的用法

今野昌俊(東北大学(院))

本発表では、英語における「談話標識+直接話法」の形を成す構造を考察し、この談話標識の働きを、報告者の主観的判断を表す解釈的用法のマーカーであると主張する。他者の思考や発話が報告される際、引用符は不可欠なものではない。また、直接話法伝達部が引用句の途中に挿入的に生起する際、分離した引用句の前半部側が引用符を伴わない事例がよく見受けられる。この部分が概念的内容を表す要素の場合、登場人物にその思考は帰せられるのに対し、つなぎ語が生起する場合は報告者と登場人物のいずれにその思考は帰せられるのかを本発表では考察する。

参考文献: (1)内田聖二. 1998. 「(の)だ」—関連性理論からの視点— 『現代英語の語法と文法』 243-251. 大修館書店. (2) Blakemore, Diane. 2010. "Communication and the

Representation of Thought." *Journal of Linguistics* 46(3): 575-599.

8室[1号館 154教室]

1. Language and power in the blogs of freshman students of MSU-IIT: a critical discourse analysis

POLITO, Rabindranath (Mindanao State University—Iligan Institute of Technology)

2. Metaphorical promising: Joint construction of political speech

NILEP, Chad (Nagoya University)

Political promising is dangerous. In many societies leaders must make promises, but if events do not occur, the politician loses power or position. This paper examines metaphorical promising, where political actors are held accountable for discourses jointly constructed with others. Discourses are labeled "promises", yet do not comprise a single speech act. They are jointly constructed by multiple speakers, hearers, and referees, but attributed to a single actor. I examine two cases of metaphorical promising: Japanese PM Yukio Hatoyama regarding Air Station Futenma in 2009-10, and US President George W. Bush funding AmeriCorps in 2001-03. Although Hatoyama avoided direct promises on Okinawa, he was held responsible for expectations created by various politicians and media. When Bush's 2003 budget reduced funding for AmeriCorp, a volunteer program he had raised money for, news media accused him of breaking a promise. But any promise emerged from discourse among Bush, other politicians, and media.

3. Modal concord in Japanese: Some initial observations

LARM, Lars (Lund University)

Modal harmony is the phenomenon where one single modality is expressed by the combination of two modal expressions, as in (Halliday 1970: 328): Possibly this gazebo may have been built by Sir Christopher Wren. The importance of this phenomenon is reflected in papers such as Geurts and Huitink (2006) who coined the term 'modal concord'. This talk focuses on the following question: How can the study of Japanese modality contribute to the ongoing discussion of modal concord as a general and cross-linguistic phenomenon? Japan has a rich tradition in the field of modality, and valuable research has been conducted on patterns of co-occurrence between modal adverbs and grammaticalized modal markers. There is thus a solid theoretical and empirical foundation for cross-linguistic work. I suggest there are different types of modal concord in Japanese, such as subjective epistemic, objective epistemic, and evidential concord.

Selected references: (1) Geurts, B. & Huitink, J. (2006). Modal concord. In Dekker, P. & Zeijlstra, H. (eds), *Proceedings of the ESSLLI Workshop Concord Phenomena at the Syntax-Semantics Interface*. Málaga. 15–20. (2) Halliday, M.A.K. (1970). Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English. *Foundations of Language* 6(3), 322–361.

4. Addressing syntactic issues semantically/pragmatically: A case study of island-(in)sensitivity in Japanese cleft constructions

SERAKU, Tohru (University of Oxford)

This paper defends the following thesis: what are usually considered "syntactic" issues are fruitfully handled in terms of "semantics/pragmatics". I argue for this thesis by analyzing the island-(in)sensitivity in Japanese clefts. Hoji (1990) notes that if a clefted item has no case particle, it is not sensitive to an island, while if it has a case particle, it is sensitive to an island. I propose that this distinct behaviour of the two types of clefts is properly handled as an outcome of semantic/pragmatic structure-building, modelled within

Dynamic Syntax (Cann et al. 2005): semantic/pragmatic structure is constructed in an incremental fashion as a string is parsed word-by-word. A focus item is parsed by means of global structural underspecification, which is later resolved; this resolution is possible only if there is no case particle, since the lexical entry of case particles blocks such a resolution.

References: (1) Cann, R. et al. 2005. *The Dynamics of Language*. Elsevier. (2) Hoji, H. 1990. *Theories of Anaphora and Japanese Syntax*. Ms., USC.

ポスター発表 (12:25~14:20) [1号館]

ポスター1室[1号館 144教室]

1. has gone と is gone の出現環境と意味の動機

岩田真紀(京都大学(院))

本発表は、<have+過去分詞>による完了と<be+過去分詞>による完了について、has gone と is gone を具体例としてコーパスのデータをもとに比較分析し、両者の出現環境および意味に差異を認め、その差異の動機を考察する。英語の現在完了の resultative は過去の事態の結果状態が現在に認められることを表し、一部の自動詞は<be + 過去分詞>で動作・行為が完了したことによる結果状態を表すため、(1a)(1b)は同義とされる。

(1) a. All my money has gone.

b. All my money is gone.

しかし has gone と is gone の出現位置や共起する副詞類には明らかな特徴がある。この観察に基づき、両者に見られる差異はそれぞれの完了が表す事象の連続体におけるプロファイル位置の違いに由来すると考えられること、従って<have+過去分詞>と<be+過去分詞>の表す完了の意味の動機は異なり、両者は同義とは言えないことを論じる。

参考文献: (1) Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2. Stanford: Stanford University Press. (2) Michaelis, Laura A. 1998. *Aspectual Grammar and Past-Time Reference*. London: Routledge. (3) 岡田伸夫.1985.『副詞と挿入文』大修館書店. (4)山梨正明. 2009.『認知構文論』大修館書店.

2. 対話の参与者間における言語的響鳴と連鎖

伊澤直仁(慶應義塾大学(院))

本発表は、大局的な背景として Du Bois (2001)をはじめとする対話統語論(dialogic syntax)を設定し、対話における参与者間の類似発話の使用、すなわち響鳴(resonance)に着眼する。その上で、参与者間の言語的響鳴が有する性質について、a)なぜ類似発話が使用されるのか、b)類似発話の生起により何が達成されるか、の2点を軸として考察・精緻化を試みる。議論に際しては、観察可能な言語的振る舞いの集積として対話コーパス(SBCSAE)を採用しつつ、連鎖構造と絡めて考察を行う。なお、対象言語はコーパスの便宜から英語とする。

参考文献:Du Bois, J. (2001). "Towards a Dialogic Syntax". University of California, Santa Barbara [manuscript].

3. 「共話」の観点からみたマレーシア語母語話者のあいづち分析

勝田順子(名古屋大学(院))

マレーシア語母語話者の母語の対面自由会話において、黒崎(1995)の「共話」の5類型がどの程度出現するかを調査・考察する。また、それを、日本語母語話者の「共話」の5類型の特徴と比較することも目的とする。結果として、マレーシア語母語話者

の黒崎(1995)の「共話」の5類型は、日本語母語話者と同様に出現し、その数は日本語話者と比較して多いものであった。しかし、マレーシア語母語話者の聞き手の「共話」は、話し手の発話とオーバーラップすることが多く、それが示す意味は日本語の「共話」の性質とは異なる可能性があり、更なる詳細な分析が必要である。

参考文献:黒崎良昭(1995)『日本語のコミュニケーションー「共話」についてー』園田学園女子大学論文集 30-1:45-60

ポスター2室[1号館 145教室]

1. 介護現場における入浴場面での介助者と利用者との関係構築ースピーチレベル・シフトとポジティブ・ポライトネス・ストラテジーからの考察ー

古田朋子(名古屋大学(院))

堀江 薫(名古屋大学)

介護現場で行われる入浴介助は、排泄介助と同様に利用者(被介助者)の face を脅かす行為とされる。本発表では、脱衣介助→入浴介助→着衣介助を一連の行為と捉え、利用者(被介助者)と介助者の自然会話を録音した。そして、その中で観察された双方のスピーチレベル・シフトと介助者の利用者へのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての「褒め」に着目した。特に、介助者と利用者が1対1になる浴室での入浴介助中に、介助者が利用者より良い関係を築くために、どのような方略を用いているのかを明らかにする。

参考文献: (1) Backhaus, Peter.(2009). Politeness institutional elderly care in Japan: A cross-cultural comparison, *Journal of Politeness*,5 (1), 53-71. (2) 吉岡泰夫(2011)『コミュニケーションの社会言語学』大修館書店

2. 場所句倒置構文の適格性について

大川裕也(札幌大学)

本発表では、(1)のような文における意味機能の記述を試みる。

(1) a. In our midst appeared an unknown young man.

b. There appeared an unknown young man in our midst.

これまでの文献では、以上のような文を情報構造の観点から説明してきた。とりわけ英語では、旧情報が前置され、新情報が後置される傾向がある。しかし、たとえ不定名詞句のような新情報が後置されても、(1a)と(1b)のような2つの形式が許容され、両者の意味機能の相違点が明らかではない。そこで、以下の適格条件を提案する。

(2) 出現を表す文において

a. 「修飾要素 + 動詞 + 主語」は、対象人物が出現する場所を前景化する。

b. 「There + 動詞 + 主語 + 修飾要素」は、対象人物の出現そのものを前景化する。

参考文献: (1) Lambrecht K. 1994. *Information Structure and Sentence Form*, Cambridge: Cambridge University Press. (2) 高見健一・久野暉. 2002.『日英語の自動詞構文』東京: 研究社.

3. なぜ、従属節否定よりも主節否定(否定辞繰り上げ文)の方が多用されるのか?

森 貞(福井工業高等専門学校)

主節否定(否定辞繰り上げ文)の方が従属節否定よりも生起頻度が高いということは周知の事実であるが、その理由として、前者が FTA の軽減に寄与する「ぼかし表現 (hedge)」だからであるという語用論的説明が与えられるのが一般的であ

る。しかし、この考え方では、I don't {think/believe} you are {ugly/stupid/bad/wrong}の方が I {think/believe} you are not {ugly/stupid/bad/wrong}よりも生起頻度が高いという事実を説明することができない。というのも、この場合、『ほかさない』方が聴者(h)に対して polite だからである。本発表では、主節否定が、純粹に、p に対する disinclination あるいは ¬p に対する inclination を伝達できるのに対して、従属節否定は、¬p に incline している話者(S)が¬S による p の認識を認めていることを伝達してしまう点で h との社会的関係を悪化させる可能性があるために、使用が控えられ、結果として、主節否定が多用されることになることを論証する。

参考文献:(1) 小西友七. 1996『基本のしくみがわかる基本動詞 24』研究社。(2) Langacker, Ronald W. 2002. "The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death." JCLA 2. 193-220. (3) Wierzbicka, Anna. 2006. *English: Meaning and Culture*. Oxford University Press.

ポスター3室[1号館 155教室]

1. 「エコ」はよいこと? —批判的談話分析の立場から—

中野阿佐子(関西大学(院))

本発表では van Dijk (1988), Wodak and Meyer (2001)などの批判的談話分析の立場から、日本語における「エコ」という語の使用を批判的に検討する。Fairclough(1989)の述べる通り、言語は権力の維持に利用される。「エコはよいこと」という言説は 1990 年代に「エコマーク」という名称で、政府主導で導入された。その後、「エコバッグ」「エコカー」「エコポイント」など数々の造語を生みながら、環境保護と節約を折衷した都合のいい道具として企業による消費者の煽動に悪用されている。本発表では、従来の批判的分析の手法に加えて、コーパスを利用した定量的分析手法、および SD 法による実験的手法を利用して「エコ」という語の使用を批判的に分析する。

参考文献 (1) Fairclough, N. 1989. *Language and power*. London: Longman. (2) van Dijk, T.A 1988. *News as discourse*. London: Lawrence Erlbaum Associates. (3) Wodak, R. and M. Meyer eds. 2001. *Methods of critical discourse analysis*. London: Sage. (4) 岩下豊彦 1983. 『SD 法によるイメージの測定—その理解と実施の手引き—』川島書店

2. What do Japanese honorifics convey? —A Relevance-based approach

KOIZUMI, Yuko (Tokyo Kaiyo University)

I will discuss that modularity of mind of relevance theory can explain the mechanism of the interpretation of Japanese honorifics. Empirical studies of honorifics mainly in social linguistics, showing variety of aspect of the usages of honorific expressions, deal with honorifics independently. Treating honorifics as a module, as a sub-module of a language, could explain these independent studies and also integrate them into the studies of a whole language system, and into the mechanism of utterance interpretation. In addition, among elaborate honorific systems in Asian languages, relative honorifics of Japanese offer interesting data: Those data strongly suggest that not only a module of honorifics but another module related to the social relationship might be activated in the use of honorifics. This relevance-based approach, classifying honorifics as procedural expressions and weak implicature, can also explain why honorifics have had studied for their rich and a variety of interpretation possible.

References (1) Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: OUP. (2) Sperber, Dan. 2005. Modularity and relevance: How can a massively modular mind be flexible and context dependent? In P.

Carruthers, S. Laurence & S. Stich (Eds) *The Innate Mind*. Oxford: OUP.

3. 共同行為としての会話における「潜在」と「不在」

岡本雅史(清泉女子大学)

榎本美香(東京工科大学)

発話が言語的に表現されている以上の意味をもたらすことは長らく語用論の中心的課題である。本研究ではこれまで様々な研究分野において個々に扱われてきた言語における明示性と非明示性、存在と不在という問題を統一的な視点から把握することを企図し、単一の発話断片の産出や解釈のどちらか一方を問題にするのではなく、共同行為としての会話の中で生じた発話がどのように産出主体であり解釈主体でもある参加者にとって意味を持つのかを認知語用論的な観点から論じる。特に、会話における修復とその周辺現象について、会話参加者によって「図」として明示化されたものが、その「地」として潜在的に存在する意味を顕在化することに焦点を当てる。結論として、参加者による共同行為としての会話においては、言語表現ないしは発話の存在や不在そのものが「図」として立ち現れることで、その「地」として潜在的な意味を顕在化し、解釈の余地を規定することを示す。

参考文献:(1) 榎本美香・岡本雅史. 2011. 「修復連鎖の終了手続きとしての合意形成フェーズ」. 日本認知科学会第 28 回大会予稿集. 568-575. (2) Schegloff, E.A., Jefferson, G., & Sacks, H. 1977. "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation." *Language*. 52(2). 361-382.

ポスター4室[1号館 156教室]

1. Tone-of-voice in Japanese

CAMPANA, Mark (Kobe City University of Foreign Studies)

This paper investigates tone-of-voice in Japanese, mainly attitudinal information regarding topic or context. The diversity of tones invites a Natural Semantics Metalanguage approach, whereby emotion-words decompose into mental states of *wanting, knowing, thinking, and feeling*, which can be wordlessly 'intoned'. The first experiment elicited intoned responses to yes/no questions. Others ranked these by degree of *wanting, knowing*, etc. Highly-ranked responses were analyzed for distinctive acoustic features. Natural conversations were also scanned for TOV and compared with these samples. The findings indicate that predicates have their own signature pattern of baseline deviation, a prerequisite for interpreting attitude. The signature of one can be combined with another to form a complex signal, or tone. Over time, speakers build up inventories of such combinations. References: (1) Wierzbicka, A. 1999. *Emotions Across Languages and Cultures*. Cambridge. (2) Wichmann, A. 2000. *Intonation in Text and Discourse*. Longman.

References (1) Abelin, Å, & J. Allwood (2000). 'Cross linguistic interpretation of emotional prosody.' *ISCA Workshop on Speech and Emotion* (110-113); Newcastle, Northern Ireland. (2) Bolinger, D. (1989). *Intonation and its uses: Melody in grammar and discourse*. Edward Arnold, London. (3) Campbell, N. & D. Erickson (2004). 'What do people hear? A study of the perception of non-verbal affective information in conversation speech. In *Journal of the Phonetic Society of Japan* 8.1. (4) Couper-Kuhlen, E., & M. Selting (1996). *Prosody in Conversation*. Studies in Interactional Sociolinguistics 12. Cambridge University Press. Hirschberg, Julia. 'Pragmatics and intonation'. In *The Handbook of Pragmatics*. Horn, Laurence, &

Gregory Ward (eds.) *Handbook of Pragmatics*. 2004. (5) Reed, B.S. (2006). *Prosodic Orientation in English Conversation*. Palgrave MacMillan, UK. (6) Shochi, T., Erickson, D., Rilliard, A., Aubergé, V., Martin, J.-C. (2006). 'Recognition of Japanese attitudes in audio-visual speech'. *Speech Prosody*, 2006. (7) Wichmann, Ann (2000). 'The attitudinal effects of prosody, and how they relate to emotion'. Department of Cultural Studies, ms. University of Central Lancashire. (8) Wierzbicka, Anna (1999). *Emotions Across Languages and Cultures: Diversity and Universals*. Cambridge University Press.

2. The meaning of the diminutive shift in Japanese: Its dimensionality, regularity and pragmatic effect

SAWADA, Osamu (Mie University)

Studies of child language acquisition have shown that in the early stages of acquisition of Japanese as a first language, there is a tendency for babies to pronounce [tʃ] (or [ʃ]) instead of [s] (e.g. *juusu* 'juice', *juuchū/juusyū* 'juice, baby talk'). Interestingly, this phonological error committed by babies has been conventionalized in adult grammar as a device for creating a flavor of baby talk. The purpose of this presentation is to investigate the interpretive mechanism of the diminutive shift in Japanese in terms of the semantics/pragmatics interface. I will argue that the function of diminutive shifting is to shift the size of the speaker from normal to extremely small, and show that (i) the meaning created by the diminutive shifting is a productive/rule-based conventional implicature (unlike word-based conventional implicatures, e.g. *frankly speaking* (Grice 1975; Potts 2005) and (ii) the effect of diminutivization can differ depending on where it arises.

References: (1) Grice, H.P. 1975. Logic and conversation. In P. Cole and J. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*, vol. 3: *Speech Acts*. Academic Press. (2) Potts, C. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford University Press.

3. 誤伝達:概念構造とプロトタイプ

井筒勝信(北海道教育大学)・井筒美津子(藤女子大学)

本論は、概念構造記述とプロトタイプ意味分析を通して、「誤伝達」の生じる仕組みを明らかにする。様々な communication model が夙に提案されているが(Shannon and Weaver 1949; Berlo 1960; Miller 1966 *inter alia*)、それらに依拠して誤伝達発生仕組みを明示することは容易ではない。その最大の原因は、いずれの model も conduit metaphor (Reddy 1979)に依拠し、いわゆる message を発信者から受信者へと「送られる」ものと想定する点にある。本論は、toolmakers paradigm (*ibid.*)に準拠して communication の概念構造を記述し、その中に誤伝達を同定する。語用論によれば、message は話者の「発話の意図」と、語彙・文法の指定する「伝達内容」からなる。従って、いわゆる「発信」と「受信」は、「発話意図⇔伝達内容⇔言語表現⇔音声・文字」という段階からなり、隣り合う段階間での要素対応が音韻・文法・語彙・語用論的知識によって定まる。誤伝達は、そうした対応が話者・聴者の間で容認しがたい程度に齟齬を来す際に生じる。この容認度は、プロトタイプ意味分析(Coleman and Kay 1981)によって測定され得る。

参考文献: (1) Coleman, Linda and Paul Kay. 1981. "Prototype Semantics: The English Word Lie." *Language* 57-1: 26-44. (2) Reddy, Michael J. 1979. "The Conduit Metaphor—A Case of Frame Conflict in Our Language about

Language." (3) Shannon, Claude E. and Warren Weaver. 1949. *The Mathematical Theory of Communication*.

4. 「名詞句からの外置に関わる制約」と「指示」の関係について

中田智也(京都大学(院))

本発表の目的は、名詞句からの外置に関わる制約に対して説明を与えることにある。この主題に関する多くの先行研究に共通する問題点は、外置の適否を二者択一的に予測することにある。こうした理論に対して Stucky (1987)では、ある理論によっては不適格と予測される文も、判断者にとって処理が可能であれば適格となり得ることが示される。この主張は外置の適否に対する二者択一的な決定に疑問を投げかけるものである。本発表ではこの見解を支持し、上記の制約は「傾向」として捉える。そして、この「傾向としての制約」を説明するために、「指示」の概念を中心に据えて考察を行う。結論として、名詞句からの外置に制約が生じる際には、主要部と外置要素との「強い結びつき」が働くことを導く。さらに、この「結びつき」は Grice の「協調の原理」によって支持される語用論的概念であることを示す。

参考文献(1) Stucky, S.U. 1987. "Configurational variation in English: A study of extraposition and related matters." *Syntax and Semantics* 20 (2) Grice, H.P. 1975. "Logic and Conversation." *Syntax and Semantics* 3

シンポジウム (14:30~17:00) [1号館 151教室]

Aspects of Meaning in Discourse:
Towards Interdisciplinary Pragmatic Research

Chair:

Lawrence Schourup (Osaka Prefecture University)

Designated Discussant:

John Du Bois (University of California, Santa Barbara)

1) Embodied action in interaction: A conversation analytic approach to action-formation

Aug Nishizaka (Meiji Gakuin University)

In 1968, Harvey Sacks proposed a policy for studying action-formation in the following way: first locate recognizable action in actual interactional data, and then proceed to elucidate the procedures that the participants in the interaction employ to generate that recognizable action. In this study, through the analysis of the video-taped interaction between healthcare providers and pregnant women in regular prenatal checkups, I explore a set of procedures for the formation of a particular action type, i.e., problem-presentation. As I demonstrated elsewhere (Nishizaka, 2010), though the healthcare provider does not solicit a pregnant woman to present particular problems at the beginning of each of her visits, there are still sequential positions systematically provided for pregnant women's raising their concerns. I elucidate the construction of the action at one of such positions, i.e., at the point where an examination or measurement is incipient, and discuss an implicitly involved dilemma.

Reference: Nishizaka, A. 2010. Self-initiated problem presentation in prenatal checkups. *ROLSI* 43(3).

2) "Trading places" and intersubjective understanding of spatial perspectives

Kuniyoshi Kataoka (Aichi University)

In this presentation, by focusing on the multimodal realization of spatial relations through language and the body, I will examine

the ways in which mutual understanding was intersubjectively achieved in a continuous discussion of uncertain routes and landmarks by rock climbers. The key notion here is “trading places” (Duranti 2010), which emanates from a phenomenological merger of multiple perspectives through the intersubjective comprehension of narrated scenes. In order to specify the processes that make it possible, I first elaborate on the types of perspective-taking and define “intersubjective” perspectives in terms of previous findings on “frames of reference” (Levinson 2003). Based on that definition, I will show that (1) the participants eventually came to employ differential controls of language and the body depending on their experiential status in the narrated scene, and that (2) intersubjective understanding triggered a language-body split, which dialectically encompassed the ego- and allo-centric perspectives merged into one. Such a perspective was found to be used only by the “knowing” expert, suggesting that that particular intersubjective perspective was not inherently given but collaboratively achieved in situ.

References: (1) Duranti, Alessandro (2010). Husserl, intersubjectivity and anthropology. *Anthropological Theory* 10(1), 1-20. (2) Levinson, Stephen C. (2003) *Space in Language and Cognition: Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.

3) Utterances in real time: Where interaction and cognition meet Yasuharu Den (Chiba University)

Utterances in spontaneous discourse are produced and comprehended in real time. Although some language-related research fields, including conversation analysis and psycholinguistics, have paid attention to this aspect of language, this view has not been central in linguistics. In this talk, I present my recent studies on the real-time construction of utterances, based on the corpus-linguistic methodology, focusing on how the initial and final portions of spontaneous utterances are being produced and comprehended in real time. I show that fillers and restarts at the utterance-initial position are not just disfluencies, but may serve as instantaneous commitment to a new turn, simultaneously dealing with the cognitive load of planning an utterance. I also illustrate how various kinds of resources at the utterance-final position, whether syntactic, prosodic, or non-verbal, are utilized for undelayed transition between turns, putting particular emphasis on the case of overlapping speech. Through these studies, I discuss how people solve interactional and cognitive problems at the same time and how our language is designed to fit such purpose.